

所長を二度、経験して・・・

中俣, 均

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

2023-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030079>

所長を二度、経験して…

中 俣 均

【沖縄との邂逅】

経験したことの意味に、後になってようやく気付くことがある。

1974年4月、東京大学文学部で「沖縄の歴史と文化」と題する講義が開かれた。学部や学科を横断する科目で、他学部からの聴講も可能。当時理学部地理学科の一学生だった筆者も、何を考えてのことだったのか今ではほとんど思い出せないが、聴講に加わった。講師は民俗学・宗教学の泰斗である櫻井徳太郎・東京教育大学教授。『琉球神道記』や『中山世譜』といった沖縄についての基礎的文献の解説から始まり、島袋源七のモノグラフを踏まえた沖縄の村落構造論、プリーステスとしての「ノロ」やシャーマンとしての「ユタ」などが語られた。今、当時のノートを開いているのだが、ほ

とんど予備知識のない学生にとっては何とも難解すぎる内容だったというしかない。しかし、とにかく沖縄という異文化の地が存在することだけは理解できた。沖縄への関心が掻きたてられたことは間違いない。

それもあって、翌1975年の同じ4月に開講された、今度は「沖縄の言語と文学」と題する授業に受講登録するのには全く躊躇はなかった。畑違いの度合は恐らく前年以上と見込まれたけれど。こちらの担当は外間守善・法政大学教授。主に文学を中心とした文化的な講義という触れ込みで、刊行間もない『南島抒情 琉歌百選』と『沖縄の言語史』⁽¹⁾がテキストに指定された。半期ではなく通年の授業だった。折口信夫の国文学発生論から始まった授業は、琉歌がいくらかは理解可能だったとはいえそれ以外はこれも終始難解というほかはなかったが、そう感じた学生たちを外間さんは5月のある日新宿2丁目に連れ出し、琉舞を鑑賞しながら沖縄料理を味わう時間を作ってくれた。

もう一つ、これは確か10月初めのことだったが、外間さんが眉目秀麗長身の青年を授業に同道させ、その青年がオモロの解説法について講義を始めたことがあった。恰幅の良さはどう見ても文学、しかもオモロとは不似合いに見えたが、これこそが若き日の比嘉実さんだった。

筆者が後に沖文研の所員となるのは、この時から12年後のこと。そうなる前に、所長や所員を歴任された外間さんと比嘉さん、それに長く兼任所員⁽²⁾を務められた櫻井さんという碩学たちに、沖縄についての手ほどきを受けたのだった。奇遇というほかはない。大げさに言うなら、筆者の沖縄体験は沖

文研体験でもあったのだ。こうして筆者の沖縄病は、1975年夏に沖縄海洋博に出かけたことで罹患を自覚し、1978年の「ナナサンマル」は那覇市で実体験。その年の12月には、結果的に最後になった久高島のイザイホーを5日間、現地久高島で見学するまでに急速に進行していったのだった。

【法政大学へ】

筆者が法政大学に赴任したのは1984年4月。文学部地理学科の教員公募に応じ採用されたのだが、初めは沖文研とのつながりは全く無かった。1987年に縁あって兼任所員に就任することになったが、このころの沖文研は、外間さんが事情で所員を離れており、実質的には専任所員の比嘉さん（当時助教）と東京都立大学の中本正智さんとがタッグを組んで研究所の運営に当たっていた。比嘉さんは、文学だけでなく歴史や文化にも造詣が深く、アイデアマンでもあった。そして比嘉さんの構想を、兼任所員である山本弘文（経済学部）、安岡昭男（文学部）、武者英二（工学部）の長老三氏が輪番のように所長を務めて統括し、兼任所員の東喜望、小川徹、櫻井徳太郎、中本正智、梅木哲人の各氏が適切なアドバイスをする、というシステムだった。中本さんへの比嘉さんの信頼は篤く、それは傍目にもよくわかった。まだ何も知らない筆者も、例えば1988年度に比嘉さんがタイで在外研究に当たっていた時には、『沖縄文化研究』誌の編集作業をほぼ一任されて苦労したこともあった。⁽³⁾

1990年代は、振り返ってみると沖文研の激動期だった。まず92年12月、浦添市長だった比嘉昇氏（比嘉さんの実兄）が無投票4選を果たして間もなく57歳の若さで急逝。実さんは有力な後継候補の一人と目される渦の中に放り込まれた。⁽⁴⁾また93年度には、長年の懸案だった比嘉さんの教授昇格人事が理不尽にも文学部教授会において否決される。⁽⁵⁾さらに94年2月、畏敬する中本正智氏が病魔に倒れた。多くの大切なものを失った比嘉さんを、沖文研は所長に据えて慰撫した。90年代前半は、数々の受賞作となった『小湾字誌』の事業に比嘉さんが心血を注いだ期間でもあった。が、ついに96年10月末をもって比嘉さんは退職し、沖文研は専任所員不在という危機に陥ったのだ。⁽⁶⁾

【最初の所長時代】

筆者が最初に沖文研の所長に就いたのは1998年4月のことだった。任期は2年。この時、若輩の筆者に与えられた使命は大きく二つあった。一つは比嘉実さんの発案が結実した国際シンポジウムを成功裡に実施すること。もう一つは新築されるボアソナードタワー21階への研究所の移転交渉であった。法政大学国際シンポジウムは、「アジアのなかの琉球・世界のなかの沖縄」と題して、シンポジウムの前半部を沖縄（琉球新報ホール）で、後半部を東京（星稜会館）で行なった。こうした構成等については、当時兼担所員でもあった法学部の鈴木佑司教授と比嘉さんとの間で話が進んでいた

こともあり、所長としての筆者はむしろ事務方に徹していればよかった。シンポジウム自体については、『縄縄文化研究』第25号（1999）で全体像を特集している。

この時に強く感じたのは、沖文研での研究活動のあり方である。沖文研では創設以来、研究活動の中心は、沖縄の特定の島嶼を対象とし、研究所に關係するさまざまな専門分野の教員・研究者たちを集めた「総合調査」として行なわれ、1979年から5年間にわたった久米島の総合調査に始まって、久高島、渡名喜島、八重山を対象地としてきた。確かに、一つの対象（この場合は島嶼という地域）に多様な専門分野からアプローチすることで、それまで見えなかった対象が浮かびあがることも稀にはあったが、しかしメンバーの専門分野を超越した研究視角や学際性を開拓するのはよほど強い思い入れがないと難しく、総合調査は分担調査に終わってしまうことも少なからずあった。第二次大戦後に創設され、同じような「総合性」を志向していた九学会連合が、その活動を停止したのが1994年。沖文研でも似たような問題が存在したといえる。前掲の国際シンポジウムのタイトルは、そういった意味で、「総合調査」の終焉とともに、沖縄研究をより大きな空間スケールの中において手掛けることを宣言したことになる。しかしそれはまた、沖文研の現有研究資源（人的な面も含む）に照らせばかなり困難なことも意味したのであった。

旧第一校舎からボアソナードタワー21階への研究所の移転は、客観的にはスムーズに運んだと目されるかもしれないが、四十歳台の若輩所長の主観としては、経営学部出身の総長と常務理事二人に適当に

あしらわれたのではないかという思いは残っている。要するに空間の分捕り合戦だったわけだが…。

【二度目の所長時代】

二度目の所長就任は、2015年4月のことだった。前年度途中に、当時の屋嘉宗彦所長から、ご自身の定年退職を2015年度末に控えて、次の所長を引き受けるよう要請され、ある程度の覚悟はしていたものの、難しい前途が目に見えてもいたので複雑な思いだった。

この時の課題は大きく分けて以下の三つ。①機能不全に陥っていた専任所員の退職の意向が示されたため、その後任の採用と専任所員としての役割の再確認、②研究所を構成する各種「所員」等の委嘱の実態を見直すこと、そして③専任所員を補佐する研究所の専門的職員の増員とその待遇を根本的に改善することであった。①は曲折を経たものの大里知子氏の就任により解決、②も大里氏らの協力を得る程度に進捗を見、改革は現在も進行中である。問題は③で、これは大学理事会（および事務部局である研究開発センター）との、今思うと壮絶な、と個人的には言いたくなる戦いであった。冲文研の事務職員は、かつて専任の主任が配置されていたが、それが一般職員になり、ついには非正規雇用の職員になった。大学全体の事務職員配置方針によるものだが、この壁を突き崩すのは至難の業だった。詳細は筆者在任中の冲文研所報編集後記に毎回のように記した。一私立大学の付置研究所

として沖文研が存続するとはいかなることか、毎日考えさせられ続けた。研究成果としての定期刊行物3種を毎年刊行し続けること。沖縄研究に関わるさまざまなイベントを時に立案し実行すること。沖縄に関して日々起きている出来事を、把握し意義付け、情報として提供すること。これらは研究所の、いわば平時の基本的活動である。そして、こうした平時の活動は、それが欠損でもない限りなかなか目立たない。その一方で、日常化した活動をほとんど評価せず、外部資金の獲得による研究活動のみに研究所の存在意義・価値を見出す大学理事会の見識のありようとうとうやって闘うか。そうした発想の持ち主には、例えば作家・坂上泉が小説『渚の螢火』巻末に記した「…沖縄社会の文化風俗の調査には、法政大学沖縄文化研究所の所蔵する…各種資料が大変参考になりました」との一文は、およそ沖文研の存在する意義としては認識されることはないであろう。とにかく、疲れ果てた6年間ではなかった。

【注】

(1) 外間守善＋仲程昌徳(1974)『南島抒情 琉歌百選』(角川書店)

外間守善(1975)『沖縄の言語史』(法政大学出版局)

(2) 兼担所員は法政大学の専任教員、兼任所員は法政大学以外の大学等を勤務先とする者。沖文研の所長は兼担所員が務める。

(3) 『沖縄文化研究』15号(1989)

(4) 比嘉さんの昇氏に対する憧憬の念は、自ら編集した昇氏の遺稿集ともいべき書に表わされている。比嘉昇(1993)…『比嘉昇歌文集―太陽子の街・浦添市と歩んだ十二年』(比嘉江美子・宮城豊発行)

(5) まずは法政大学の公文書ともいえる1冊から引用する。

「：沖縄文化研究所専任所員の昇格人事を文学部教授会で審査してほしいとの依頼を受け、審査小委員会を設けて審査を行い、小委員会は教授会に昇格を妥当と提案するが、教授会で否決される。この問題は、かつて外間守善教授が誹謗中傷を受けたことがあるが、外間教授の名誉回復がなされないままでの状況のもとでの昇格人事であったため、それへの反発も作用したとみられる。」法政大学戦後五〇年史編纂委員会編(2004)『法政大学と戦後五〇年』(法政大学) p.468。

意味不明の文章というほかはないが、そのように書くしかなかったであろう。しかしこの記述だけからでも、小委員会の決定を覆した文学部教授会の見識が問われるのは否めまい。筆者も実は小委員会のメンバーの一人であったのだが、「反発」の理由の説明を教授会で聴くことはなかった。

(6) 比嘉さんの退職は、表向きには浦添市長選出馬準備のためと言われたが、文学部教授会による昇格否決の決定が、彼の沖文研に対する情熱を失わせたのは確実であった。しかし、弔い合戦はやはり遅きに失した。筆者はそこに比嘉さんの、沖文研への愛着の深さと思う。市長選には2009年まで挑んだが当選には至らず、晩年は金銭問題なども語られ、病を得て2013年8月逝去。享年71歳。